

＋命を守る！ 子どもの 事故予防

かけふだ・いつみ
掛札逸美

Profile

心理学博士。NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表。健康心理学、特に子どもの傷害予防と安全の心理学を専門とする。



交通安全は 深刻な傷害予防と 事故予防の両面から

「万が一」のケガ予防は必須

「万が一の深刻な出来事は、いつどこで誰に起きても不思議はない」と前回の最後に書きました。交通事故は、その最たるもの。猛スピードで走る鉄のかたまり＝自動車。乗っている人にも周囲の人にも大きな危険をもたらします。「危険だけど、便利さ(楽しさ)にはかえられない」、人間はリスクと便益をつねに天秤にかけながら生きていますから、自動車に関する限り、リスクをゼロにすることはできません。

それでも、死亡・重傷リスクを減らすため、エアバッグ、シートベルト、子どものためにはチャイルドシートなどがついています。ただし…、どれも「万が一、交通事故が起きたとき、車の中にいる人の命を守るもの(深刻な傷害の予防)」であり、交通事故そのものは予防してくれません。

人間は「つい」「うっかり」の生き物ですから、事故は起きます。前を見ているつもりでも、見ていない瞬間はあります。「つい」スマホを見てしまうこともあります。あなたがとても注意深く運転していても、横道から自動車や自転車が突然飛び出してくることもあります。事故を100%予防することは不可能。だから「万が一、事故が起こるかも」と考えて、シートベルト、チャイルドシートは絶対に使わなければいけないのです。「万が一」があなたやあなたのお子さんに起きたとき、後悔しても遅いのですから。



「事故そのもの」の予防も重要です

大人でも「つい」「うっかり」は多発。子どもは…？ 予測できない行動をしてあたりまえ、自動車の危険などわかっていなくてあたりまえ、ですよね。「ドアを開けちゃダメ!」「窓、開けないで!」、そのときは「は～い」と返事をして、興味ある行動は繰り返すもの。チャイルドロックは、子どもの命を守る必需品です。「走行中に子どもがドアを開けた」「ルーフを開けて頭を出した」…いつでも起こりうる事故であり、非常に深刻な結果になりかねません。

そして、歩行中や、自動車のまわりで起こる子どもの死亡事故。こればかりは、保護者に限らず、車に乗っている大人や自動車のまわりにいる大人が「子どもがいるかも、と考えて車を動かす」「子どもの存在を意識を向ける」ことで、事故そのものを予防する以外に対策はありません。車に乗るときは、子どもをまずチャイルドシートに座らせる。降りるときは子どもが最後、そして車のまわりでは必ず手つなぎ。

大人であっても、ぶつかってくる車から身を守り、ケガを防ぐ方法はないのです(私自身も2度、交通ルール違反の車に衝突され、救急搬送されています)。運転席からは姿が見えにくい子どもの場合、危険はもっと高まります。自動車をめぐる子どもの安全は、事故予防と(深刻な)傷害予防の両面から、日々、大人ひとりひとりが行動するしかありません。

for Kids

for Kids

for Kids